



写真: 宇佐見利明

ヲブセルウェーシヨ

第27回

歴史隠蔽

三カ月前、米国のクリントン政権下で大統領補佐官を務めたサミュエル・バーガー氏が、FBIの捜査を受け、ケリー大統領候補の顧問を辞任した。国立公文書館から機密書類をズボンや靴下に隠して持ち出した容疑。国家安全保障担当だったバーガー氏がかかわったテロ対策書類と見られる。『まずいもの』だったのだろう。

ワシントンの公文書館には、重要政策にかかわった閣僚や担当者のメモや走り書き、電話記録まで保存されている。厳格な法律、制度に加え、権力執行機関に課された説明責任は将来の人びとにも及ぶという認識が、国中に浸透している。国立公文書館の職員は二五〇〇人を超える。翻^{ひるがえ}つて、日本は四二人。比較にならぬ。蓄積はあまりに貧弱、「戦後史を学ぶには米国の公文書を当たれ」が歴史学者の常識だ。さらに二〇

〇一年に国立公文書館が独立行政法人化されて以降、各省庁からの文書移管が激減した。対等な関係が失われ、文書の直接要求ができなくなったからだ。行政の隠蔽体質、説明責任意識の欠如。立ち返るべきは、意思決定の記録を必ず文書で残すという原点である。後世の検証にさらされるとなれば、政策決定に緊張ももたらす。問題は役人だけではない。ムラの恥を世間にさらしてはならぬという閉鎖性が、私たちを縛る。私たちは全員、歴史という法廷における証人であり、公文書はその証拠書類である。(辻)



「ヲブセルウェーシヨ」とは
事物を視察することなり

「学問のすゝめ」福澤諭吉
十二編より

Observation Number 27